慈光

昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十一年三月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二〇二号）

目次

信仰問題の急所……近角常観……(1)
塚原秀峰師の入信と生涯……柳瀬留治……(5)
歎異抄第三章の味わい……福島政雄……(9)
一道会の記（二）……榊原徳草……(20)

第十八巻　第三号

信仰問題の急所

近角常観

一、信仰と実験

吾人は求道の文字を掲げて、世の真摯なる精神的の要求を促し、また世の煩悶せる人々、この目標の下に切実に求め来りたまえるたしかに其所なり。然れども、世人が求道心に力を用いること深きに随って、自力に陥るの弊害の多きを認むるや、吾人は遂に注意を促して曰く『信は吾人の求むることによりて得るに非ず、仏陀の吾人を求めたまう御恵より来れるもの也』と。即ち求道は吾人の求道に非ずして、仏陀の求道より来れることを認めざるべからず、然れども、これを認めたるときは嘗て自ら求めつゝありしことが、直ちにこれ仏陀の我を求めたまいし事実たりしことを認むるの時なり。

求道の文字すでに切実なる要求を促す、況んや実験の信仰を披瀝し、吾人自身の経路を描くのみならず、告白欄に於いて同朋獲信の実験を説く。世の未信求道の士、益々胸躍り心迫りて、我またこの実験に達せんと、所謂急作急走して頭燃を払うが如き底の態度に出ずる、また宣也と謂つべし。けだしこれ入信前における真摯なる状態にして、これがために、遂に偉大なる実験に達せし人其数すこぶる多し。然れども、求道者の多くが、その実験を目的とするために、実に入り得ざるもの亦すくなしとせざるなり。ここにおいてか吾人は切言せざるべからず。曰く『実験は実験せんと欲して得らるべきに非ず、知らず識らずの間に、図らず仏の御力によりて実験せしめらるるものなり。

従来、真宗の安心問題に苦辛するの人は、聞き分け、知り分くることを以て信を得べきが如く考える者、比々みなしかり。又近時、青年の道を求むるもの初めは理論を以て信を求めんとし、理論に非ざることを知るも、なおかくか、く思料することを以て信仰なりと誤解す。吾人は此等新旧いずれもの誤を去らんがために『信仰は仏陀直接の接触なり、内心の実験なり』という。しかるに又其実験なる文字に粘着して我実験せんと思料し、自らその心を苦しむるに

至る、何れの時か仏陀の大慈悲に浴する時あらん。もしいわゆる実験の文字を以て、吾人の力によりて企図するものとせば、何の処にか他力信仰の実あらん。そも〳〵念仏といい、他力といい、易行と云い、皆これ吾人自力難行の成就し難きがために仏陀を念じ奉るに非ずや。すでに仏を念じ、仏を信じ、仏を称う、吾人の頼みとすべきは仏陀のみ、吾人は仏陀の大慈大悲に浴するの外何等の念仏かあらん、何等の信心かあらん、抑々又何等かの実験かあらん。

唯仏陀を仰げ、唯慈悲に浴せよ、信仰は唯文字の如く、仰ぐべし、信ずべし、これすなわち実験なり。もしまた仰がんと企て、信ぜんと計らわば、遂に自力の思量を脱すべからざるなり。もし自力の計らいを加えなば、如何なる言語も遂に大悲を説くべからず。そも〳〵他力浄土の真髄は古来唯この自力律法の計らいを打ち破りて、如来大悲の慈光に接触し奉るの外なし。

浄土一門起りて念仏易行の道起るや、忽ちに観念の意義をもって自力の計らい加う。ここにおいて観念の念仏を去りて敬虔称念の念仏を専らにす、これ善導、法然の念仏にあらずや。

然るに法然上人の門弟また称名念仏に拘泥して自力修行の計いを加う。ここに親鸞聖人が信楽開発の実験を示し信心歓喜の一念に即得往生の大事成就することを顕示したまう。後世またその信心を獲得せんと企て、如来に帰命せんと企て、今また信仰を実験せんと企つ。

これ等みな、知らず識らずの間に自力律法の信心に陥らんとするもの、実に戒むべきなり。

親鸞聖人曰く。それ信楽を獲得することは如来選択の願心より発起し、真心を開闡することは大聖矜哀の善巧より発起せり。嗚呼如来清浄の親心をさしむけたまう、人生の悲喜苦楽こと〳〵く一として大聖矜哀の善巧たらざるなし。嗚呼何ぞ左視右顧、低徊踌躇するの餘地あらん、吾人は唯々この大悲を仰ぎ、この本願を信ずるの外なきなり。これすなわち信楽開発の一念、内心実験の真相なり。

二、歓喜と相続

人の初めて如来の光明に接するや、実に歓天喜地、踴躍身の措く所を知らざるなり。眼に視るところ、耳に聴くところ、一として身を歓ばしめ心を喜ばしめざるはなし。このとき人生は悉く如来大悲の光明瀰漫して、何物かその光沢を蒙らざることあるべき。かつおもえらくかくの如きの歓喜は決して滅殺するの期あるべからずと。

しかして年月を経るに随い歓喜漸く減じて、しば〳〵煩悩の黒雲を以て蔽わる、ここに於いてや自ら昔日の歓喜を回想して自らうらやむの愚に陥ることあり。これ唯円坊が聖人にただしたるの点にして、聖人かえって答えて曰く

『喜ぶべきことを喜ばぬにて往生は一定と思い給うべきなり』と。蓮如上人戒めて曰く『喜べたすけんとの仰せにあらず』と。これみな歓喜の深くたのみとすべからざるをいましめたまうなり。けだし、歓喜は仏の大悲大願を仰信したる結果として、自然に発動し来れるもの、毫も信仰の目的とすべきものにあらざるなり。

しかるに世人ひとたび、入信歓喜の状態に入りて後、その歓喜のようやく減ずるに及びてや、必ずや信仰の退転なりと思料して修養の力を以てその歓喜の情を回復せんと企つるに至る。けだしこれ、如来の願船に乗じてなお徒らに船中に自力を労する人の如し。吾人ひとたび如来の願船に乗托したるものは、如何に歓喜の情の消えたることあるも毫も本願の力を疑うべからず、たとい怒濤狂瀾、天を蹴るも本願の船は必ずや吾人を彼岸に運ぶべきなり。もし信仰已後に自力修養を以て歓喜を加えんと欲するは船中にありてなお手を労し、足を歩み、重きを負い、徒らに気がね心を起すが如し。ただに何等の功力もなきのみならず、かえって願船のたしかなるを疑うものなり。

聖人曰く『大悲の願船に乗じて光明の広海に浮びぬれば、至徳の風静かにして衆禍の波転ず』と。又讃じて曰く、『大願海のうちには、煩悩のなみこそなかりけれ、弘誓の船にのりぬれば、大悲の風にまかせたり』と。

これ皆、本願力に乗托するの至安なるを教えたまう。吾人は歓喜の有無に心を止むべからず、唯本願力の偉大なるに信頼すべし、至安至楽の境はおのずから開け来らん。和讃に曰く、『五濁悪世のわれらこそ、金剛の信心ばかりにて、ながく生死をすてはてて自然の浄土にいたるなれ』と、本願力を信ずる外に何物をも加うべからず。然れどもひとたび本願に乗じたるものは、彼岸に達するまでは少しも変るべからず、又何ぞ海の平なると怒れるとを問わん。

信後歓喜のすくなくして修養をもって回復す可からざるに至るや、自らおもえらく、これ未だ信仰の浅きが故なり。ねがわくば信仰を深めてもって大歓喜の情をおこさんと、その歓喜を待ちもうくることは前者に同じくしてひとたび乗托したる本願の上になお加えんとするは即ち一なり。然れども、前者は船中にありて気がね心を労するに反して、後者は船中にありて猶一層の安慰を要求するに似たり。そも〳〵弥陀の願船は、吾人罪障の凡夫、常没常流転のものを救いたまう大悲にあらずや。もしこの願船なかりせば吾人凡愚何ぞ寸時も安んずることを得ん。吾人すべからく自らその罪悪を懺悔して大悲の恩沢を仰ぐべきなり。信仰は常にその現在の境遇に安んじて恩徳を感謝するもの、何ぞ一層の安慰を要求せんや。そも〳〵信仰は安慰のためにあらず、安慰は歓喜と共に信仰の結果なり。信仰はむしろ苦

痛にありて却って大悲の善巧を感謝し、困難に遭遇して一層の勇気と感激とを持来するものなり。聖人流刑に遇いて師教の恩致を感謝し、辺鄙の群類を化するを喜びたまうもの、皆本願力の強盛なるによらずんばあらず。身を粉にしても報ずべし、骨を砕きても謝すべしとのたまえる所以のもの、実に聖人信後相続の活力なり。嗚呼これ本願力の実現にあらずや。

かくの如く願船に乗ずるものは気がねもすべからず、安慰も求むべからず。暴風駛雨も悲しむべからず、光明の海、大悲の風また何ぞ気がねするを要せん。唯称名念仏して彼岸に向うべき也。吾人はここに蓮如上人三首の詠歌をあげてこの文を結ばんかな。

ひとたびも仏をたのむ心こそ
まことの法にかなう道なれ

罪深く如来をたのむ身になれば
法の力に西へこそゆけ

法をきく道に心の定まれば
南無阿弥陀仏と称えこそすれ

（明治四十一年二月。求道五巻二号）

近角先生『法語抄』

○最後の一点

人、往々我は多年信仰を聞きて、おゝよそは了解されたれど、最後の一点、お慈悲を頂くところだけがハッキリせぬという。されど甚だいわれなきことなり。信仰は筆に酷似したる絵なればとて、一点たりともあやしき処あらば全部偽筆と定まるが如く、信仰もいかによく理解したればとて、真実お慈悲に腹ふくるるに非ずば何の益もたたず、故に信仰の評価は零点か百点かの外なし。

○一滴のバチルス

ここに四斗樽に一杯に清水が汲まれているとする。その水は飲んでよし、顔を洗うてよし、何にでも用いられる。ところがそれに一滴のバチルスが混入すると、もう全体が駄目になる。僅か一滴だなどと言うて居られぬものがある。

○秩序の渕源

『愚禿鈔』の上巻には賢者の信を聞いて、内は賢にして外は愚なりと鑽仰し、下巻には、愚禿の心をあらわして、内は愚にして外は賢なりと述懐したまう。

これ仰いで如来の威神力を貴び、伏して自己の罪悪を慚愧する、秩序的精神の渕源となるのである。

塚原秀峰師の入信と生涯

柳瀬留治

私が信仰を求めて近角先生の日曜講話を聞きに参ったのは大正二年からでした。其頃、元清沢先生から受継がれた古い求道学舎で、正面に瑞巌寺の観音様の石曜軸と清沢先生のお写真の額が常にかけてあった。そして畳の上に坐ってお話を聞くので足がしびれた。受付には常のように丸茂猛さん塚原秀峰さんがいられた。私は心を澄まして信仰を聞こうとすると雑念妄想が起り、どうにも仏のみ心が聞けぬので、相談した。

当時催眠術が盛んに流行したので「誘導催眠により精神統一され虚心になった時、この信仰を聞かせて頂くと判ると思うのですが」と相談し、笑草になったことがある。

塚原さんは一周り上の辰年生れで人格者なので、皆が塚原先生と尊敬していた。氏は近角先生の従弟で、東京帝大の哲学科を優秀で出られて成田中学で修身を受け持たされ、自身修身を教える資格のない泥沼の心で、教壇に立って、どうにも倫理道徳が口から出ない由で苦しまれた。苦悶の極、「常観兄が信仰を説き乍らわしに信仰を与えてくれぬとはけしからん。一つ面当てに死んでやろう」と早朝学舎の玄関前で首吊り場所を探し、うろついていた所、見付かったという方です。

信仰が判らずさ迷い歩く同志の氏と私がいつしか親しい二人となったのです。それは大正の中頃で、高輪中学で英語と歴史かを受け持ちの頃、多分教頭だった筈です。或時は求道学舎の日曜講話後東大の心字の池のほとりをさまよい、時には一杯やって何処とはなしに歩き、或時は憂さ晴らしに浅草公園の安来節に入ろうというのです。氏は無邪気な方で、見ながらアハ〳〵笑うのです。或時お宅へ行って飲んだこともあった。前の奥さんの頃でした。それはお妹さんの親友ということで、可愛い妹さんの勧めのまま結婚されたもので、何か神経系の欠陥のある方で、子供が可愛いばかりで、主人の勉強するのが大嫌いで、留守中主人の大英百科辞典や英書など皆屑屋に払ってしまったという

こともあり、生徒や親達が相談に見えても、「主人が役立たずだから駄目ですよ」といったりされた由です。氏はそれで絶えず苦しまれた。或日帰宅すると氏を家に入れないことがあり、立廻りが始まり、ネクタイを掴み喉をしめ、引っ掻きむしって顔は血だらけ、到々追い出され、その顔では行き場もなく常観先生の下へ転げ込まれた。「耳をむしり取られたと思い、手をやったらあったのでほっとした」と云われ、「兄が大笑をし迎え入れられた」と常音先生から聞いたことです。氏はその顔では学校へも出られず学舎にいられた。二三日後のことまだ酷いみみず腫れでした。夫人は後年病が重り根岸病院に入院中縊死された。氏は信仰上の苦しみと家庭との両方の悩みを十数年続けられた。

其後音羽洋裁学院長富永さんのお世話でそこの幼稚園長と結婚された。其時「妻というものが何んとよいものだろうか」と喜ばれた由、常音先生大笑いでした。無邪気で朗らかな氏は声も朗らかでした。勤行など朗々たるもので、いつ頃からだか、謡曲を始めていられて、「謡曲をやると実に心がさらりとして天心玲朗となる」と言われたので、常音先生は苦い顔をし、「それは一時の心の胡麻化しだ、真の信仰で闇が晴れ、手放しになるのでなければ」と言われるのでした。誠に朗らかで、又苦しむ方で、或時苦しんで常音先生に話を求められた。先生は「君、もう信仰など判ろうとするな。わしが斯く信仰に大安心してここに付いているんだ。君が態々信仰を判ろうとして苦しむことはいらない。わしが生きている以上信仰はわしに任せて置き給え」と言われた。それで塚原氏は「ああそうか、常音君は引受けてくれるのか、わしが判らなくてよいのか、常音君はわしより若いんだ。わしの生きている限り、君は信仰を以て引受けていてくれる……わしが判らない儘引受けていてくれるのだ。……之は誠は有難い」と任せる気になり、永年の重荷が除かれ、肩が軽く、楽になり、軈て嬉しく有難くなり、涙と共に念仏が止めどなく湧きくるのでした。

「いつまでも信仰の得られぬ、業の深いわしである。それを憐んで下される。それはかねて聞かして頂いているお慈悲なのだ。信仰など判ろうとするな。信仰の判らない奴だからお憐み下されるのだ。永年、信仰が得られたら心に確り信念が出来、心が明るくなり、しゃんと生き行け、力強くなれると思っていた。ああ永い迷いであった。……弥陀の大悲は信仰が永劫に得られぬわしに、さぞ、空虚やる方ないであろう、之を唱えよ、と与えて下される念仏であったか」と判ったのです。お慈悲の判りにくいのは、信じたら助ける、といった対価的でなく、信仰が判らないから憐れで捨てられぬ、との何の対価も持たぬのみか、涯しない闇、罪業を背負っている、それを悉皆引受けてやろうとの、

無条件というか、否、汚いどぶ泥を背負っているが為可愛想だと、あべこべに、それだから可愛想で捨てられぬのだという、世にあるまじき不可思議なお呼びかけである処、その桁はずれな処が信じられず、いつ迄も判らないのです。恐らく塚原さんもその桁はずれのお慈悲なため永年判らず苦しまれたことだと思うのです。私も永い間その桁はずれである為お慈悲が判らなかったのです。それも一桁や二桁位の桁外れでなく、私の際限のない一に対し、それを全部引受けてやろうという、無限の十、無限大のお慈悲なので私もびっくり致し、何という不思議なお慈悲でましますかと、号泣させられたのです。不思議とは、世にあろう筈のない、思いもよらぬお呼びかけそれです。

それで塚原さんは漸く「ああそうであったのか」と永年の心の迷いが晴れたのです。其後常観先生の講話を嬉しげに聞き、時には口を開けて聞いていられた。又時には涙を流して泣いていられることもあった。大安心されてから講話中よく居眠りしていられた。苦抜けした氏には常観先生のお話が迦陵頻迦の声の如くで夢心地を誘ったのであろうか。覚めてはきまり悪そうな無邪気な顔をされた。

世界大戦の初期は実践高女の校長でしたが、戦いが苛烈を加えて危険になり、故里の江州虎姫の篠原寺へ戻られた。其後脳出血かで臥される身となった。寺は虎姫駅から長浜の間で北陸線から見える田の中であり、常観先生の本葬が延勝寺で行われ、常音先生一行が列車で通過の折、窓から拝んでいられるらしく、遙か田野の彼方、お寺の窓にそれらしい姿が見え、常音先生は「ああ、あれが塚原君だなあ」といって合図をし、目礼されるのでした。恐らく氏は涙に咽んで合掌していられたことであろう。

病床の氏は遂に再起出来ず、昭和廿七年三月二十日に世を去られた。

思えば永い年月共に迷い、又共に仏の遣瀬ないみ心に涙を流して喜んだことでした。

お慈悲が頂けても碌に仕合せにもならず、大戦に苦しめられ、生活に病気に苦しむという一生でした。信仰に苦しんでも家庭上苦しんでも聊もひねくれぬのみかあの無邪気な先生がお気の毒にも不幸なまま終られたこと、返すがえすも痛ましく思うのです。

故塚原秀峰師のことば

これは師の自坊での報恩講に正信偈の講話草稿の一部です。昭和二十四年度とあり、晩年のものと存じます。（柳瀬留治）

私達は始終、己が心を頼みとして、ああである、こうである、ああでもこうでもないと思い込んだり、この世の中を頼みとして、仕合せだ、不仕合せだと、喜んだり嘆いたりしているのであるが、愈々己が心はあてにならぬ、この世は頼みにならぬものと見透しがつく、己が身は煩悩成就の凡夫、この世は結局火宅無常の世界で、よろずのこと皆もってそらごとたわごと誠あることなきに、ただ念仏のみぞ誠におわしますと、知らせて貰えたが無明の闇が破れたと申すもの、言い換えれば浅間しいこの世が捨てられて、尊いかの世が眼につき始めたこととも申してよろしいのであります。私はよくなりたいが、よくなれぬと知れたらば、仰ぐは大悲ばかりと心が明るくなりそうであるが、凡夫の悲しさ、其後と雖も相も変らず頼むべからざるものを頼み、当てにならぬことを当てにし、愛瞋憎の煩悩が雲霧のように常にたえまなく湧き起り清浄光の信心天を覆いかぶさって来る。さりながら一たび無明の闇の破れた以上は、もはや再びまっくらになるということはない。惑いや煩いに心をとられることは、煩悩に眼さえられて摂取の光明みざれども大悲ものうきことなくて、常に我身を照らすなり、と知らせて貰えば、ああまた当てにならぬものを当てにし、頼みにならぬものを頼みにして、悩み煩うたことの勿体なやと、改悔懺悔の思いとなり、あてになって下さるはただ仏様ばかりと気がついて、雲霧があるまま、其の下から摂取の光明に照らされて、心が安らかになってくる。所謂不断煩悩得涅槃である。そのことを譬えて譬如日光云々と仰せられたのであります。私は此頃、この摂取不捨ということが誠に有難く思われる。殊に一昨年の病気以来細々念仏相続させて貰っているが、私という奴は人一倍罪障が多い性分に生れついたと見えて、直ぐに自分の心に目がついて、ああであろうか、こうであろうか、これではならぬ、ああではならぬと、遂に仏の慈悲を喜ぶ心も消え失せた如くになるのであるが、一たびこの摂取不捨のことわりを聞かせて頂き、そういう罪深き障り多いもののための摂取不捨である。罪深く障り多い程、それをひとしおに憐れと思うて下さることである。「末代の凡夫罪業のわれらたらんもの罪はいかほど深くともわれを一心に頼まん衆生をば必ず救うべし」との仰せが耳に聞こえてくれば、「慈光ハルカニカムラシメ光ノ至ル所ニハ法喜ヲウトゾ求ベタマウ」と大安慰をさせて下さるのであります。……

歎異抄第三章の味わい（二）

福島政雄

釣錢をとる心

私は三十七歳の夏から凡そ一年半ばかりドイツのベルリンを根拠地として西洋に居りましたのでありますが、一年ほどドイツ人の或る家庭の一室を借りておりました。そこは御主人が亡くなって、その奥さんに大きい子供さんが四人ほどあったのでありますが、その奥さんは五十格好のように見えましたが、その奥さんと段々自由な勝手なことを言い合えるようになって居りました。

或時、私という奴は悪魔のようなものです、と何の機会でありましたか云ったことがあります。それから奥さんが貴方は悪魔ではない、いい方だと言って貰いたいのでしょうと云われましてギャフンと参ったことがあります。どうも私の言うこととというものはそういうことになるようであります。多田鼎先生が「人間には釣り銭をとろうとする心がやまない」とそういうことを仰言っていました。つまり自分は、こういう悪人であります、というているのは、貴方は矢張りそうじゃないと云われたいために云うのである、我々にはどうしても釣り銭をとる心がやまない、と、こういうことが私の心に残っております。

実際その通りでありまして、自分が、言立って自分が悪い奴だという場合は大抵この釣銭をとろうというこころがあります。貴方は立派でそうじゃない、と云われたいと表面にそう思っているばかりではありません、心の底にそういうものがあるのであります。それだから自分は悪い奴だ、こんなことを言っているのは、何処かにそうした心があるのであります。

それで親鸞聖人が結局仰言ることは「善悪の二つ総じても存知せざるなり」と、歎異抄の中にそういうことがありますように、そこまで言っていらっしゃる。私共が自分は悪人だといっている時は、善悪ということを何時も対立させて、そして云っておるようであります。そこのところに五分五分根性が抜けないところがあります。こう云って、

向うから、こう云って貰おうというような心持がある。そうでありますから、本当のところは今申しましたような「他力をたのみ奉る悪人」というのは、向うから照らしておされてしまって、自分は善だ、悪だとそんなことを云えないところまでいっている。それが「他力をたのみたてまつる悪人」であって「親鸞におきては善悪の二つ総じても存知せざるなり」と仰言るところがそうであろうかと思うのであります。

キリスト教からの見方

私がまだ極く若かった頃、親鸞聖人のみ教に転じましてやがての頃であります。キリスト教の副牧師さんであったかと思うのであります。その方が私のところへ来られまして、最初にはこの歎異抄を非常にほめられました。歎異抄のように、短い言葉の中に信仰問題を徹底的に述べてあるものはキリスト教の方にもない。その点で歎異抄は世界で唯一の宗教の告白であると云ってもよい、とそこまではほめられるのであります。けれども一つの問題がある、歎異抄の何処を読んでも仏に救われた上には斯様々々立派にやっていかねばならぬとそういうことは見つからない。

キリスト教の方では自分が神の救いをうけた上は、こんどは神の仰せられる斯様々々のよきことを行えということがチャンと聖書に出ているけれども歎異抄の何処を見ても、信仰に徹底した上には、こういう風に立派にやって行けということを一向に云ってないではないか。仏教というものは非常に消極的な教えであって、その点が甚だ物足らないように思う、と、結局は仏教攻撃論のようなものになったのであります。

山上の垂訓と五惡段

その頃はまだ歎異抄のみ教に入ってまだ一年と経つか経たない頃で、それに答えることが出来なかったのであります。段々のちになりまして今申します大無量寿経の悲化段五悪段というところを段々味わうようになって参りました。

それからキリスト教の上では、キリストの山上の垂訓などに道徳上大切なことを言ってありますからして、そういうことを意味して言っておられたことと思うのであります。

それからキリストの山上の垂訓とこの大無量寿経の五悪段あたりを較べて見ようという気持になりました。私の三十代の頃であります。そしてここと、ここが似ているというようなことを色々考えて見ましたのであります。そして成程同じ問題にふれているところがある。男として女に対する心持というような問題では似たような問題となって両方に出ている。そういうことを段々くらべて考えています

うちに、然しキリスト教の聖書の道徳的教訓と思われるところと、この大無量寿経の悲化段、五悪段というものは根本が違う。こういうことを感ずるようになりましたというのは、キリストの山上の垂訓を読んでいると、何だか兄から弟がうちのめされているような気がする、兄が弟を摑まえてお前はこういうところがある、それを改めなければいかぬぞと云って、しきりに弟を打って叩いているというような感じがしたのであります。そして今の悲化段、五悪段の方は、さきに申しましたように親である仏様が非常な悲しみの心をもって、お前自身にも分っていないであろうがお前にはこういう悪いところがある、と云って下さって、お前が立ち上らなければ救われんぞというようなところはすこしもないのであります。そこで非常に徹底的の有難さを感ずるようになったのであります。兄が弟を打って叩くというのと、親がしみ〴〵と子供がまだ気づいてないところまで、種々こまかに指し示して、お前の有様は実際この通りである。これを改めろとはチットも言ってないのであります。そこのところが違うと思うのであります。だからキリスト教の方で大いにはげしく言ってあるのは、それはキリスト教の特色でもありましょうが、そこにキリスト教の不徹底なところがありはしますまいか、と思うのであります。

それから大無量寿経の五悪段というようなところになりますというと、徹底的に涙をもって教え示されている。お前はそういう有様でチットもよくなるということがない。そこを見透しておるから、そこを憐れむという、そういう教になっておりまして、それだからキリスト教の方では悔い改めということをしきりに云われますようでありますが、大無量寿経を中心とした親鸞聖人の教では悔い改めて来いというようなところは微塵もありません。そこが仏経の徹底的なところであるし、そうしますとキリスト教で救われん人も、結局はこの親鸞聖人の教を頂くようになればそこに救われる。その救われるという意味は、救われて自分が善人になるというような意味ではなく、自分が悪と思ったことのないことも、成程悪であった、仰言る通りでありますと、そういうことを教え示される。そして自分というものはそういうことをチットとも改める力のない者である。そういう改める力のない自分というものを飽くまでも憐れみ給うて無限の慈悲を注ぎたもうて、何時か一度はお前が徹底的に気がついて来るまでまことを注がずにはおられん、というこころ、それが仏のお慈悲である。

愛ということ

一体この愛という言葉、この頃日本でも愛という言葉がしきりに流行しますけれども、愛するというのは非常に相

対的な五分五分根性のことであります。こちらから愛するそれから向うからも愛して貰いたいとなり、宗教の上でも神が我等を愛し給う、こちらからも我等も神を愛す、と如何にもよさそうでありますけれども、それは矢張り不徹底なのであります。本当に神を愛するということ、神の愛に対してこちらから愛をもってこたえることが出来るであろうか。

仏教においては違うのであります。仏のお慈悲ということはありますけれども、衆生から仏へお慈悲というようなことはありません。キリスト教の人から見れば、仏教というものは一方的でいけない、キリスト教では、神は人類を愛する、人類はまた神を愛する、そこに非常に張り合いがある、仏教の方は何と張り合いがないことか、仏様が飽くまでも慈悲をもって我々に対して下さる、我々から仏様に慈悲で向うというようなことはない、それだから物足らない教であるというようなことがキリスト教の方々の考え方ではないかと思うのであります。この副牧師の方がそういうことを意味するようでありますが、そこが非常に大事なことであると思うのであります。

三好先生のこと

私が三十歳の頃でありましたが、皆様ご記憶でありますか、大正時代に皇子殿下の伝育官長をつとめていられました三好愛吉先生という方がおいでになりましたが、その三好先生のところにたった一度お伺い致しましたけれど、三時間ばかりお話を聞いたことがあります。その時今の問題を出しましてキリスト教の人からこのようなことを言われますが、どうでありましょうか、と云いましたところが、三好先生、そこが仏教の徹底的なところだ、仏教では仏の御慈悲を頂いた上には、こうせよ、あゝせよと云わぬところが徹底的だ。仏のお慈悲に感じた以上は、我々の行動云為、我々言うこと、行うこと、皆仏これを為さしめ給うところであって、一々あゝせよ、こうせよと云ってないところが仏教の徹底的なところである、そういうようなことを云って、キリスト教というものは不徹底だからしてもっと徹底したものにして、それを西洋に逆輸入せねばならん、と云われたことがあります。

私も若い時でありましたから大いに感激して、お別れしたのでありますが、今頃清沢先生のお書きになったもの、また清沢先生のことを書かれたものなどを読んだりして居りますが、清沢先生の書かれたものが三好先生の仰言る通り、そのままであります。痛快と云えば非常に痛快でありますが、実際そうである。清沢先生は、我々が一度仏のお慈悲に目が醒めた以上は、もう我々は何等の責任もない、すべては仏の為さしめ給うところである。我々はすっかり責任が

なくなるというように徹底的に云っておいでになります。

道徳教育のこと

そういうことでありまして、実際この頃では御覧の通りの有様でありますので、学校の教育、文部省などがしきりに道徳教育というようなことをいって教科書を編纂しておりますけれども、どうも私なんかはそんなところへ口を出す立場でもありませんので黙って見ておりますけれども、どうも肝腎なところが抜きになっていて、道徳教育、々々と云うようなことをしきりに云っている。それじゃものになりゃあしないというような感じを持って居りますのであります。

何故もっと徹底的にいかんのであるか、というのは御存じの通り終戦以后は忠孝というようなことはすっかりそっちのけであります。終戦後の学校教育というものは、君に忠だ、親に孝だというのは、過去の封建時代の道徳であって今日の道徳とは違うという行き方であります。そんなことでは道徳の根本が立つのであるか、本当は我々は道徳の根本などはちっとも立ちはしない。そして親に対しては、不孝であり、国に対しては不忠であり、愛国心も持たないそういうところを徹底的に知らせる宗教的教というものがそこになければ、どんなに道徳教育ということを説いても駄目じゃないかというようなことを思いますのであります。

そういうことでありまして実際根本を忘れている、終戦直後私の二男が私のところへかけよって来まして、我々はこれから天皇陛下をどう考えていったらいいでありましょう、と尋ねるのであります。そこで、日本国の親爺と思えとこう云ったのであります。この二男と申しますのは私の子供が八人生れましたうちの一番よく出来た子供で、今は病気して居りますが、それは直ぐ受け容れたようであります。

聖人の教の徹底味

私その時つく〴〵考えましたことは、今からさきは忠とか孝とか云うことを言わなくなるであろう。そしたら日本はどうなるであろう。親鸞聖人の教というものが徹底的に日本国民に行きわたるようにならなければ日本は救われない。こういうことを其時思いまして、自分は甚だ微力だけれども親鸞聖人のみ教を何等かの形でことに青年達に吹きこんで行きたいということを感じましたのであります。もっともそんなことを説法すれば親鸞聖人が本当であるということを今さっき申しました、その反対で私が法然上人のようにお説法せねばならぬとなったら成程間違いになると思います。けれども自分は親鸞聖人のみ教をこういうように受取って日本の国民としては皇室というものをこういう風に頂くと、そういうことを心の根本に持っているという

ことは大事なことではあるまいか。忠だ孝だといわないで忠孝の実がそこにあるようになる。そういうことを考えながら、この頃はまた中国の老子、あの老子の教を読んで見ますというと仲々痛快といいましょうか、心にひびきますのであります。この老子というものは私の若い時代にはチッとも面白いと思いませんでした。ところが五十、六十、七十となって参りますというと、老子の教が非常に面白い。

たとえば極端な言いごとでありますけれども「六親和せずして孝慈あり」親子兄弟親類などがお互に和らがないから親孝行せよ、親心を持てと、こんなことを云うのである。本当のことは、そんなことを言わないのが本当である。「国家混乱して忠臣あらわる」国家が混乱して、忠臣というようなものが出て来る。そうすると楠正成だってそうだということになります。本当のところは、その国家というものが本当の平和で国民お互が、今日のように春季闘争だ、年末闘争だということをしないようになって、そして皆が和らいでいく。そうすると、その国はそういう方面で手柄を立てたということが無くなる。国家が混乱するから忠臣が出る。国家が本当に平和であれば忠臣などは無くなる。云うことは極端でありますが、成程そうだというようなことを思いますのであります。そういう老子の教というものが何処か仏教の教にひびくものがありますからして、この頃また老子というものをすこうし読んだりして居ります。そうしますと若い時に読んだのと違って仲々面白いのであります。

善言と美言

老子の一番おしまいのところに「善言は美ならず、美言は善ならず」というような言葉があります。本当によいことを伝える言葉というものは美しい言葉というのじゃない、美しく飾り立てた言葉というものは、それは善い言葉じゃない、善言は美ならず、美言は善ならず、といってあり、成程そうであります。私共が矢鱈に言葉を飾る、或は文章を飾って色々とよさそうなことを云うている。それではどういうものか。本当のことは言葉などの飾りを離れて、本当に人の心に徹するというのが本当ではありませんか。

そうなってくると親鸞聖人の歎異抄もそうでありますが聖人のお書きになっている言葉というものは、飾ってあることはチッともないのであります。皆そのままをお書きになっているのであります。或は昔のお経から色々なことを引いておいでになりますが、飾った美しい言葉、所謂飾った言葉でなくして、そしてそこに何とも云えない美しさがあるというのが私共が聖人の御教を頂いて感じますことであります。善言は美ならず、ということを感じますのであります。

飾りの無いこと

そういうことでありまして、老子の言葉などが私にひびくといいますのは仏教の精神、ことに親鸞聖人の御教の精神からそれが私にひびいて来ますのであります。

そういうことなのでありまして、歎異抄を通読いたしましてもそういう感じであります。一方から言えば、歎異抄の文章ほど、いい文章はないと、こういう感じであります。が、それでは歎異抄は飾ってあるかと言えば、チッとも飾ってないのであります。そういうところが本当に人の心に徹してくる。飾った文章というものは一寸人の心を引きますけれどサアそのしんがないのでありましよう。私などが青年時代などには飾った文章というものが好きでありまして、たとえば高山樗牛というような人の飾った文章が好きで読んだものであります。ところが段々のちに、その飾った文章というものは美しくはあるが本当のところに徹して来ないような恨みがあるというようなことを感じるようになりまして、それでたとえば飾らない文章といいますと、福沢諭吉先生の福翁百話というのを御存じでしようか、福沢先生が色々な問題について書いておいでになります。

これは福沢先生が一つの文章を書いて、それをあまり学問もしていないようなお婆さんに読んで聞かせて、そのお婆さんに分らんところがあれば書きなおして、非常に平易な文章にされた。それが福翁百話の文章なのでありまして、飾りというようなことを通り抜けてしまったところに本当のことが言えるようになるというようなことなのであります。

二つの文章観

そういうところからして、つまり親鸞聖人のようなお方は、文章というようなところからしても、そこまで徹しておいでになる。歎異抄の文章は或意味から言えば非常にいい文章であると云われます。それもそうでありますが、その文章というものは造り飾りをしたものではない。スウーとその云われていることがその私なら私にスウーと心に入ってくるようなそういう文章であるということになります。

そうでありますからして、その点から云いますというと日蓮聖人の文章というものは大分飾りがあります。日蓮聖人を攻撃する積りはありませんけれど、日蓮聖人の文章を私は二十歳前後によく読んだものでありまして、あんまり日蓮聖人を攻撃するという心は持ちませんけれども、然しその文章というものは相当飾りがあります。それだから高山樗牛というような人が大いにそれに感じて、聖人の文章から大分拝借して、「況後録」というような非常に力強い文章ではありますが、然し大分飾った文章で書かれてあります。どうもお弟子からお金を送って来た時でも仲々輪をかけてお礼の言葉を述べるというようなことがあります。

親鸞聖人の晩年の御手紙を拝読しますというと、関東のお同行から銭何百文かを送って来た、その受取りというようなお手紙に、銭何々たしかに受取ったというようなことが書いてあるばかりで、其他は信仰上のことをお書きになっています。

それから日蓮聖人の方は、これ〳〵のお金を受取った。その功徳は斯様々々でというようなことで、全く誉め立てたり飾ってあるのであります。そこが全く違うのであります。日蓮聖人は非常な舞台の上に坐って、そう云えば悪いかも知れませんが、大見得を切ってやるというようなところが何処かにある。もっとも身延山に入ってからの日蓮聖人は大分違って親鸞聖人に似て来ていると云ってよいでありましよう。

私が尊敬して居りました方に守屋貫教という日蓮宗の方がありました、その守屋さんから色々なことを教わりましたが、どうも自分はこういうことを問題にしている、日蓮聖人に親鸞聖人のような趣きを発見するというようなことを自分の一生涯の問題としている、というようなことを云われましたが、親鸞聖人の矢張り飾りもなく、しみじみとおって来る、そういう態度なりお言葉なりに感じておられたのでありましよう。日蓮聖人は身延山に入られる以前は大見得を切ってやるというようであるけれども、身延入山以後はズウーと変って来ていると云われたのであります。それは親鸞聖人に似て来られたのであるというような意味に解釈してもよさそうであります。

聖人の特色

親鸞聖人という方は、親鸞聖人を抹殺するという方がありましたようにこれと云う本には一向に出て来ない。法然上人伝がいくつもありますけれど、その中で親鸞聖人のお名前の出ているのは、一つだそうであります。法然上人が七ケ条の御誓文をお書きになって、そのあとにお弟子方が名前をズウーと書き連ねてある中に、綽空という親鸞聖人の前のお名前が出ている。それ一つであって、成程真宗の方で書かれた法然上人伝には親鸞聖人のことが色々出ているけれども、その外の人が書いた法然上人伝には今の一ケ所をのけて何も出ていない。それには色々の理由もありますでしようが、親鸞聖人という方が社会の表面に出て大いにやるという方でなしに社会のむしろ下層にあって、名もなき人々を相手にしてしみ〳〵とやっておいでになったという、そこのところに親鸞聖人の特色があると云いますか、親鸞聖人が何処々々までも法然上人のままをお伝えになったということと、社会の下層の人を相手にして決してこの世間にアッと云われることを一つもなさらなかった。

ことに晩年は京都の何処にいらっしやるか分らぬなかに色々の御述作をなしておいでになる。教行信証なども晩年に京都でご完成になったものであろうといわれておりますが、この頃の親鸞聖人は全く社会から隠れて色々の著述をなさっていたのであります。

そういうことからして決して社会の表面に立って自分は活躍しているぞということをなさらずに、飽くまでも社会の底の底にひそんでいて、何時の間にかそのみ教がひろまっている。しかも法然上人のように説法するというのでなくして法然上人のみ教を自分はこう受けて居ります、あそこをこう味わって居りますというようなことばかりで、それが何時の間にか周囲の人々にしみじみと心持が伝わっていった。ここに親鸞聖人の非常に尊いところがあると私共は感じますのであります。

蓮如上人

蓮如上人は中興の大事な方で、浮土真宗をおひろめになった方でありますけれども、蓮如上人は大分社会を相手になさったという一面があります。そうでありますから私は若い時からそう思っておりますが、蓮如上人の御一代聞書などは非常に有難く頂いておりますけれども、蓮如上人という方は矢張り高坐の上にあがってお念仏のことを説き聞かせるということをなさったお方であって、それで非常に大事な方でありますけれども、私共の行く道といたしましては、先ず親鸞聖人について、それから蓮如上人のみ教をうける。蓮如上人に先ず行くということは考えものであります。そうでありますから徳川時代に御本山なんかには歎異抄なんかは滅多に人に見せるものじやないとされ、蓮如上人の御文というものを読ませ、親鸞聖人のものでは御和讃、そういうものばかり読ませて、歎異抄などは危険なものであるから滅多に読ませてはならぬとなっておりました。こういう行き方を徳川時代にしたことは、それでは所謂形式的に真宗御繁昌のもとにはなりましたけれども、本当に親鸞聖人の御教をしみこませるということにはどうであったかと思うのであります。

もとよりその間に妙好人といわれる人々も出て居りますけれども、そのようなやり方はそう感心したものではないと同時に、私共としては先ず親鸞聖人から直接み教をうけて、それから蓮如上人へと行くのが真宗の御信心を頂く上に大事なことじゃありますまいかということを私は以前から感じて居ります。

聖人晩年のお手紙

親鸞聖人のお書きになったものは大変にむずかしいものがありまして、私なんかはそんなむつかしいところを仲々読めないでおりますけれども、例えば晩年のお手紙という

ものは非常に有難いものでありまして、私は若い時からそのお手紙には非常に感激をいたして居ります。

それでありますから、そうむつかしいものにかからないで親鸞聖人の御教を受けたいというには、歎異抄は勿論でありますが、今の晩年のお手紙のうちで私共によく分るものもあります、チトむずかしいものもありますけれど、よくわかるものもあります。そういうお手紙を見ると、親鸞聖人の非常に心の広いお方であるということが分るのであります。たとえば笠間の念仏者の疑い問われたるに答えるお手紙などは、私共非常に有難く頂いて居りますところのお手紙であります。その他、薬あらばとて毒を好むべからずということのお手紙などから、少くとも二つ三つは私共の心にスーと分るようなものがあります。

そのように晩年の心の広いそして非常にしっかりしたお手紙と、歎異抄だけでも親鸞聖人のみ教を頂くことが出来るということを、前から私は感じて居りました。

恵信尼のお手紙

それからもう一つ申しますれば、恵信尼のお手紙というものが非常に大事なものだと思います。恵信尼のお手紙が十通ばかり残っております。その本物がお西の本山の宝庫に大切にしまってあります。私も親鸞聖人の鏡の御影と恵信尼のお手紙を拝見したいと、私が広島に居りました頃何度もお西の本山にお願いしましたけれども、あれは大事なものだから見せるわけにいかぬ、とはねつけられましたが何度もお願いしましたら、それじゃ見せるというわけではないけれど、何月何日虫干のためにこれ〳〵の部屋に並べてあるからというようなことで見せて頂いたのであります。その恵信尼のお手紙を見ますと実に立派な筆蹟であります。書という方面からいっても立派なものであります。

ことに親鸞聖人が十一月二十八日にお亡くなりになってそれを一番最後までお看護になった一番末娘の覚信尼が、その様子を越後に居られるお母さん恵信尼に知らされた、そのお返事、長いお手紙で、歎異抄を裏付けするようなところもありますし、その他、親鸞聖人と恵信尼との間の夫婦の関係というものが実に立派であると、そういうことを感じますのであります。

それは御伝鈔の何段目でありますか、親鸞聖人が六角堂に百夜籠ろうという願を立てて九十五夜の明け方に、フト夢を御覧になったというところがありましょう。あの夢、あれをよく考えて見ますというと、親鸞聖人はあの頃から若し自分が聖徳太子のように結婚生活に入るならば、それならば自分の妻になる人は観音様の化身とも云うべき人であって欲しいということがあの四句の偈文にあらわれていると私はそう受取っております。

そして恵信尼が聖人がおかくれになってから娘さんの京都に居られた覚信尼に出されたお手紙の中にはお聞きになっているでありましょう。自分の夫の親鸞聖人を観音様の化身と見ておいでになります。あれはあのお手紙の中のいいところであります。どうぞあのお手紙をお読み頂きますように。そういたしますと親鸞聖人から自分の結婚する相手は観音の化身のようでありたい。恵信尼の方は、自分の夫になっている人は観音様の化身であると、こう云う夢を見られる。このような美しい夫婦関係というものは仲々無いものである。そういうことを考えますと、親鸞聖人は家庭の上でも何とも云えぬよいお生活をなさった。

聖人晩年の苦しみ

ただ一つ善鸞と仰言る御長男のお方が、どうも迷信めいたことを関東の御同行なんかに伝えて、すこし関東の人々の心をかきまぜられ、親鸞聖人はそれを非常に苦にしておいでになった。

あの問題はまた、こういう問題があります。親鸞聖人がとう〳〵関東の御同行に善鸞は自分の子ということを思い切った、まあ義絶のお手紙というものが残っておりますが実はその手紙が問題でありまして、近角先生なんかは、親鸞は弟子一人も持たずと仰言っておられる方が、自分の子供のことについて義絶の手紙というものを関東の御同行にお出しになるはずがない。だからあの手紙は本物でない、とこういう風に近角先生は仰言っておられました。そこは大分問題となっておりまして、私もそれを本当に判決する力はないのでありますけれど、近角先生の仰言ることがどうも本当じゃないかと思うのであります。

晩年の親鸞聖人が御長男善鸞という方について非常に苦しんでおいでになるということが何とも云えないお気の毒なことであるというようなことを思うておりますのであります。

その他の点におきましては親鸞聖人のお家庭というものは実に立派なお家庭であったと思いますのであります。今日は色々なことを申上げましたが、「善人なおもて往生をとぐいわんや悪人をや」ということを最初の問題といたしまして、それから脱線したような話になりましたが、今晩はこれ位にさせて頂きます。

（終り）

◆聖句抄◆

「仏身をみるものは、仏心をみたてまつる。仏心とは大慈悲これなり。仏心はわれらを愍念したまうこと、骨髄にとおりてそみつきたまえり。たとえば火の炭におこりつきたるがごとし、はなたんとするともはなるべからず。摂取の心光はわれらを照らして身より髄にとおる、心は三毒煩悩の心まで、仏の功徳のそみつぬところはなし」（安心決定抄）

一道会の記（二）

榊原徳草

松本先生のお話の概要は次の通りです。

ここ四・五年、毎年この一道会に参らせて頂きまことに有難いことであります。私は只今、松山の愛媛大学に奉職しております。昨日は昔の親鸞会の会友ですでに亡くなられた方々十名の友の追悼会に、ここ浄住寺様であわせて頂き、今日は一道会に参加させて頂き、感慨がことに深いことであります。

池山先生は、念仏には三つの段階があると言われましたことを想い浮べます。世間一般には、念仏は人の死と結びつけて考えるが、私は念仏はこの日常生活の中に花を咲かせておることを泌々と思うのです。ことに家庭の中で念仏が活かされていることであります。聖人の御家庭の中では恵信尼さまが聖人を観音菩薩の化身として信じておられたことは文書で明らかであります。

そのことについて、池山先生は昭和十三年に往生せられまして、その翌年に吾々は先生の追悼録「呼ぶ子鳥」を作りましたが、その中に、友子奥様が先生の死の前後について書いておられる、その「霊前に語る」の所を一寸読ませて頂きます。

十月二十四日

御自身の死を予知せられてから今日は三日目、いよいよその期の近づいたことを自覚されてか、この夜私を傍に呼んで

「ことによると今夜だめになるかも知れないからお前は寝ないでついておいで」

と真剣な中にも余裕を見せながら申されました。あわて者の私は、はや気が転倒し、いう言葉も分らず、暫く暗然と控えていましたが、やっと気をとり直し

「本当にそんな気がなさいますか、おえらいでしようがもう一度元気を出して下さい。あなたはこの家の光なんです、一生涯お寝みになったままでもかまいませんからせめて生きてだけいらつして下さい」

と一生懸命に哀願しますと
「生きたくとも命がないじゃしようがない……南無阿弥陀仏……可哀想にとうとうお前も一人になるんだな」
と言って、じっと私の顔をみつめ淋しく微笑まれましたので私は数日来我慢に我慢を重ねていた涙の堰がついにきれてしまいました。
「あゝあゝ可哀想に、然しこれで別れきりじやないんだよ、そのうちにまたあえるからな」
「そのおあいする日までが辛うございます」
と泣き入る私の顔をしげしげ御覧になって
「私が死んだらお前はきつと病気するよ」
と私の身を気遣いつつ更に
「そしてお前もそう長くはないよ……実際はその方が仕合せかも知れないんだがね」
と重ねられるお言葉に
「いつまでも一人残りたくありません、お浄土へいらしったらすぐ迎えに来て下さい」
と、私は予てきかされていた御法もどこへやら、覚悟も落着きも失いはててスツカリ取り乱してしまいました。
それなのに、この愚かにも恥ずべき私の一言半句もおろそかにせず聞きとって、やがてニッコリとして
「しっかり念仏するんだ、しっかり念仏するんだ、どこまでも念仏でつながっているんだよ、いいか、南無阿弥陀仏」
と諄々と説かれるお念仏に、私はやっと御親の懐に気づかしめられ、すがりつく思いでお念仏にかえらせて頂きました、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。
やがてお念仏の中からあなたは再び語をついで
「ザッと十年だつたねお前と居たのは、短い夢だったな考えてみりや私も随分わがまま者だったが、しかしお互に仕合せだつたよ」
としみ〴〵語って下さいましたので
「私こそは本当の仕合者でした。こんな穢い愚かな私をようも今日まで可愛がって下さいました。我儘はあなたのことじやなくて、私のことです、すみませんでした」
と身も心も涙につかりきって、且つは謝し、且つは詫びる切なさ、悲しさ、骨肉を裂かれる思いとはこのことでありましよう。
フト思い出されたように
「敏郎のことはもう安心だし、愛子はお前がひきうけるし、何も心配はないが、しかしあれらも可哀想だな……南無阿弥陀仏」
あゝ私にはあなたの思いのかくまで深くかかっている忘れ形見が残されていました。自分の辛さに、一人で生

きぬゝにゝないとは思たるあさましい利己の一念であったでしよう。お念仏でつながっている二人の間柄、永遠に御一緒の筈でした。さればこそ「お前が引きうける」と仰言っても「後をたのむ」とは仰言らなかったのであります。ありがとうございました、「どうぞ安心してお浄土へいらっして下さい、そして如来様と共に絶えずお念仏をお送り下さい。私はそのお念仏の中であなたと共に力の限りなすべきことをなし、やがて日が来ればお浄土へ参らせて頂きます」と涙ながらにお誓い致しました

×××　　×××

私は当時京都から大阪へ通っていましたが、奥様は神戸の西宮の女学校の先生をして通っておられたので、よく汽車でお会いしました。京都から西宮へは二時間で、それを毎日通っておられ、往復四時間です。いかに先生のために御苦労なさっておられたかを私は知っております。この奥様の御苦心、いかに念仏がお家庭にしみこんでおったかということを思うのであります。

先程、白井先生は「お慈悲によって私にお届け下さるお念仏」と仰言いましたが、池山先生の御家庭の一勿体ない言い方ですが先生は業にさいなまれて、普通の家庭でありますれば、それは大変なことである筈でありますが、大悲のやるせないお念仏によって羨ましいほどの麗わしいお家庭が、只今の奥様のお文章の中にあらわれておるのであります。大悲のお真実(まこと)こそ現実の我々の生活にこうして活きて働く姿を私は非常に有難く心打たれるのであります。

これは日露戦争の時の話でありますが、あの大激戦で有名な二百三高地の戦闘で、金沢師団の一人の兵隊が重傷で倒れました。ひどい傷で眼も耳も駄目になってしまっても生命は時間の問題という有様です。軍医も手の施しようがない重態でありました。その兵隊は全身血に染む重傷の中から、故郷の母に会いたいと叫び続けました。遠い旅順の戦場で、しかも重傷の身で金沢の母を呼ぶのです。けれどどうして会わすことが出来ましよう。とも角も、無理でも日本へ行ける所まで送ることになって病院船へのせて出港しました。奇蹟的にも無事で下関に着き、金沢の病院に帰りました。すぐ病院から兵隊の家へ伝令をとばし、お母さんには、その重態をかくして、帰還したことを告げました。母は只事ではないと直感して、野良仕事の着物のままで馳けつけました。

病院へ入るなり虫の息の子供に対面しましたが、目も見えず耳も聞こえぬ息子に、現在目の前におる母を伝える方法がないのです。だが、母の知慧は突差の間に野良着のふところをあけて、乳房を子供の口にふくませました。年寄った母のしなびた乳房が今にも生命の絶えようとしている

重態の子供の口にふくまされたとき、目もみえず耳も聞こえぬ子供の口からお母さんと叫ぶ声がほとばしりつづけたのであります。

仏と私、親様とこの私とはこのようではありませんか。まことに我々はこの重態の兵隊そのもので、無眼人、無耳人であります。母は恥も外聞もなく、真実そのものの仏智をもって、大悲の乳房を口に押し入れて母を知らしめるのであります。今ここに居る母ぞと知らせて下さるお念仏であります。「オネガイダカラ　スグキテオクレヨ」であります。

子の母を憶うがごとくにて　衆生仏を憶すれば
現前当来遠からず　如来を拝見うたがわず

このお乳のナムアミダブツを、これを頂いていられる、これを味うていられる先生と奥様とのお家庭の中を私は見せて頂いたのであります。

毎年この一道会に参らせて貰いまして、有難い御縁にあわせて頂き、池山先生の御恩を年と共に有難くいただいております。どうも有難うございました。

（記者註）

毎年私は会の準備や、持前の散乱放逸の根性で落着くひまもなくこの会の中心に引きずりこまれるのです。緊張するほど心は八方に散り乱れるのですが、その乱れ心の隙間々々から法の津沢（しんたく）といいますか、会の催おしに引きこまれて筆記の役を果していくのです。心が法の催促によって乱れたままで隙間々々がうるおうてくるのです。池山先生がかっての日に、集中と書かれた文章の一ヶ所や、如来のうながしといわれた講演のお姿や、「唯円房の蔭にかくれている榊原さん保木さん、かくの如きの吾等がためなんですよ」とのお呼び声に「檜舞台に」思わずタボハゼの私が、「呼び上げられて」いる姿など、筆記しながら思い出されてくるのです。

白井先生のお話が去年は途切れて感涙のお念仏で終ってしまったが、一年を昨日の如く過ぎて、今年は「一子地」のお心から「オネガイダカラスグキテオクレヨ」の如来の遣瀬ない大悲心に直ぐつながってのお話で、時間も超えて今ここにとの感をつくづく感じるのです。そして名号碑の裏に刻まれた池山先生の言わば重大な御左訓が、白井先生にはあのように牛歩の如く浸透していかれたのか、私などはスッと何でもないように簡単に馴れそめてしまっているおそろしい乱想の身が傷まれる。どうしても駄目な奴だなあと筆記しながら悲しまれると、そこにまたお念仏がまた明るく救いあげて下さる。

宮地先生の米国一年間のお味わいの、御本願に腰が坐ってこそ世々生々の父母兄弟なりの境地に生かされるという、本願にほこるので、本願を我物顔にしてはならぬお味いを何かしらカラリとした気持で伺ったのでした。

松本先生の熱のこもった大悲倦むことのない只今のお念仏に、遂に涙を流してしまいました。

池山先生と奥様とは、御夫妻でありながら、あの「一つの会」の時など吾々と並んで居られる奥様に、先生は吾々と同じように「友子お前はどうかね」と現在の心境を尋ねられると、奥様は懐中から草稿を取り出して読まれるその手が緊張して震えている。ここは全く御夫妻でなく、師と弟子、聖人と唯円房の立場でありました。そんな御家庭の先生と友子夫人とのお姿があの霊前に捧げられた文章の行間に滲み出ているのが浮び出る心地がするのです。決して御往生の先生に改めてあの筆を謹しまれたのではなくて、恰度、恵信尼公と聖人の有様を髣髴とされるのであります。

×××　×××

こんな盛り上った緊張し切ったお念仏の煌々と輝く法筵が、松本先生でひときわ張りつめてしまったので、一寸休憩にしました。

所が奥の十二畳の間に皆さんが集っていかれる。そこに数個の机がならべられ、その上に長い巻物が展げられて、岡山の西本さんが説明されている。白井先生が坐って巻物を黙読して感に打たれていられる、その右左に大勢が集っている。私もうしろから垣間見るようにのぞく。西本さんの「菅瀬芳英師の臨終…」、「近角先生の筆で…」などの声が途切れ〳〵に耳に入る。

何時か私は白井先生から、菅瀬師が癌で亡くなられたお話や、また「菅瀬芳英師語録」を一度拝借したことを思い出した。その菅瀬師と近角先生との臨終近い病床における「筆談」がこの巻物だなと喫驚した次第です。

西本様は御尊父が菅瀬師のお教化を蒙り、又師の経営された学生仏教寮「同和学園」の外護者となられた念仏者であります。その御縁からこの巻物も伝承護持され、今日御披露下さったのであります。まことに深く遠い霊山会上の法薫を偲ばしめられることでありました。筆録の全文は、二百号の慈光誌に紹介せられましたので省略いたします。

（続く）

あとがき

今日は二月二十一日、聖徳太子の御忌であります。太子和讃を頂き、また十七憲法を読誦申して、鴻恩の一端を仰ぎました。

今を去る千三百年の昔、当時の日本は、文化はおくれ、閥族は闘争し、外交は振わず、文字通り暗黒でありました。日本最初の女帝推古の帝に招されて摂政となられた太子、如何ばかり難渋されましたことか。

幸に慧慈、慧聰の良師を得て、勝鬘、維摩、法華の三経を身読体解せられまして、心眼ここにひらけ、時の流れにも消されず、所の異りに障えられぬ、不滅の大道を発見された太子の御慶びは如何ばかりでありましようか。

「聖人の教は、時移り俗をかえると雖もその是非を改むる能わず云々」

と領解される太子、やがて十七憲法において

「四生の終帰、万国の極宗。いずれの世、いずれの人かこの法を貴ばざらん。人はなはだ悪しきものはすくなし。能く教うれば従う。それ三宝によりたてまつらずば何を以てか枉れるを直うせん」

と仰せ出されています。

和国の教主聖徳皇　広大恩徳謝しがたし　一心に帰命したてまつり奉讃不退ならしめよ

と渇仰随喜せられる祖師聖人の、太子の御前にぬかずかれる御姿もまたあたらしく仰がれますことであります。

○

本号には特に柳瀬先生から、塚原秀峰師の入信と生涯の貴重な記録を頂きました。一人々々の生活記録は聖典であると言つた人もありますが、ことに信の旅の記録はあとに生れた者に大切な技折りであります。

「道ありと信じて得道の人を信せず」

と聖人が御指適下さいますが、道はあると知つていても、その道に生かされている人が見出されないと力強い歩みが出来ないものであります。念仏に生かされた方々の生活記録は、まことにそうした点に貴重なものであります。

○

何ごとも移りのみ行く世の中に
花は昔の春にかわらず
かたみとて何か残さん春は花
山時鳥秋はもみじ葉　（良寛）

御案内

※毎月第一、二、三日曜午后一時半。
一道会例会。南区駈上町二ノ八八番地
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三本目
辻左入ル。

※毎月二十四日、午前、午后。
昭和区小桜町　教西寺、法話会。
市電、御器所通り下車。桜花学園東。

※四月十五日、午前、午后歎異鈔讃仰
中区南小川町久遠寺。
市電、新栄町、又は東新町下車。

慈光第十八巻第三号　昭和四十一年三月十五日発行（毎月一回十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可

定価　半年　二百円（送共）
一年　四百円（送共）

編集・発行人　花田正夫
名古屋市南区駈上町二ノ八八
電話八二一局七〇三七番

印刷人　本田政雄
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所　慈光社
名古屋市南区駈上町二ノ八八
振替口座名古屋一〇四七〇番